

語学学習クラスにおける他者紹介活動の可能性

－韓国人日本語学習者を対象にした実践－

The Possibility of Each Other's Introduction Activity

in Language Learning Classes

- A practice for Korean who Learn Japanese -

林 里香

千葉大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程

本稿は、日本語集中講義において行われた他者紹介の活動実践を振り返り、考察することを目的としている。

近年、他者紹介の活動は、第二言語習得の現場だけではなく、コミュニケーションスキルの講習や大学の口頭表現演習などでもよく行われている。今回、筆者は韓国の大学で、日本語集中講義の第1時限目の授業として他者紹介の活動を行った。この活動を計画した経緯や授業実践を振り返り、他者紹介の活動が教室内でどのような意義をもつのかを検討し、考察を加えた。他者紹介の活動は、①学生間の助け合いが生まれる、②授業担当者が学生の日本語能力と学習への参加態度を把握することができる、③学生が情報収集・選択と発表の手順を理解することができる活動である。そしてこの活動は、それだけでなく、学生と教師がそれぞれ持つ「確信」(beliefs) (岡崎 1999) の歩み寄りを促し、教室を「you世界」(佐伯 1995) である学習共同体へ導く基礎作りができる活動であることが明らかになった。

キーワード：日本語教育、集中講義、相互理解、他者紹介

1. はじめに

筆者（以下、授業担当者とする）は、希望者のみが参加する韓国の某大学で行われる日本語集中講義の授業を担当することになった。この集中講義の期間は、2週間であり、学生は授業担当者にとって全員が初対面である。授業担当者は、この集中講義のためだけにこの大学を訪れるため、常勤の教員や定期的に授業を担当している講師とは異なり、学生からは訪問者、客として意識される。このように、授業担当者が学生にとって特別な立場にあることから、第1時限目の授業は、他の授業計画とは分けて計画し、検討した。

語学講義の場合、学生同士が助け合う雰囲気や教室に一体感を作ることは重要である。また、学生の日本語能力だけでなく、授業担当者が、学生の学習への参加態度を把握することも必要である。しかし、学生の日本語能力や学習への参加態度は、クラス分けテストの結果や能力試験¹の成績だけで測ることは難しい。

これらのことから、日本語集中講義における第1時限目の授業では、以下の2点を目的とする計画をたてた。第1点目は、学生同士が助け合うことができる教室の雰囲気を作ることである。これは、特に授業担当者と学生

との距離、学生同士の距離を縮め、教室を一体化させることが重要だと考えたためである。

第2点目は、授業担当者が、学生の日本語能力と学習への参加態度を把握するための活動をすることである。これは、その後の2週間の授業を円滑に進めるために授業担当者にとって情報収集が必要であると考えたためである。

2. 問題の所在

語学学習のクラスでは、第1時限目にどのような授業が行われているのだろうか。

さまざまな国や地域から集まる学生がいる場合、お互いを知るために教師の自己紹介の後、学習者の自己紹介が行われる。しかし、学習言語による自己紹介は名前と所属を話す程度で終わってしまう場合が多い。それは、初中級の場合には、自分の言語能力に不安を持っていたり、初対面であることから緊張してしまったりするからである。上級の場合には、自己紹介を行う機会が重なっていくため、使用する語彙が限定され、準備をする必要がなくなるからである。特に、教室内で行われる自己紹介は、一対多数という場面的特徴があるため、類似した

形式のものが多く、極端な場合には「名前」の後に「よろしくお願ひします」と言い、数秒で終わってしまう。

日本語教育の現場でも教師と学習者が初対面の場合、互いに自己紹介をしてから授業をはじめる場合がある。しかし、この場合も類似した形式のものが多くなる。そのため、教師は画一的な自己紹介活動を回避しようとして、「好きな日本の食べ物」「日本で行きたい場所」などの条件を出し、それを自己紹介に組み入れることを指示する。または、自己紹介にはあまり時間を使わず、すぐに講義に入る場合もある。

今回の日本語集中講義における第1時限目の授業で、学生に自己紹介を促しても、形式的なものになるだろう。また、同じ言語を母語としている学生たちであり、初対面ではないため、互いに新しく得る情報は少ないだろう。このような場合には、どのように1時限目を計画することができるだろうか。

まず、学生は、授業担当者が学生の韓国語の名前を聞き取ることや覚えることがどれほど難しいかということをそれほど意識していない。また、日本語によって自己紹介を行う際に、聞き手を意識して行った経験はほとんどないのではないかと考えられる。自己紹介を行う際に何を話すか、また聞き手に何を伝えたいかを意識するためには、ペア相手を紹介する活動を行うことで気づきを促すことが有効である。ペア相手のよい点を発見し、発表をすることで、相互理解にも繋がると考えられる。

3. 先行研究

岡崎（1999）は、言語学習についての「確信」（beliefs）を以下のように定義している。

「言語学習についての確信は、言語学習の方法・効果などについて人々が自覚的あるいは無自覚的にもっている信念や確信を指す（以下では単に「確信」とする）。」（P147）

岡崎が述べている「確信」は、教師と学習者がそれぞれもっているものである。また、言語教育をどのように進めるべきかにかかる「確信」は、文化の影響を強く受けていると述べている。このことから、授業計画の段階で、授業担当者は、韓国語を母語とする学生がどのような「確信」を持っているのかを知る必要がある。

学習者側の「確信」ではないが、藤長他（1999）の調査では、韓国における教師の授業スタイルが「コミュニケーション能力の養成」を理念とする高校学習指導要領の改訂後であっても、教師主導型の伝統的な教室活動を主流としていることが明らかになっている。また、この調査結果から、教師が学習者中心の授業にしなければならないと意識を変えて、実際の授業には変化がないこ

とを指摘している。今回の集中講義に参加する学生も、過程よりも結果を重視し、流暢さよりも正確さを重視して学習してきた者がいると考えられる。

授業担当者は、自身の「確信」にもとづき今回の集中講義を計画した。それは、教師から知識を伝達する講義形式の授業をするのではなく、活動を通じて学生にいろいろな気づきを促す授業にすることである。そのため、第1時限目では、授業担当者と学生が、お互いの「確信」にどのような違いがあるのか、また互いに歩み寄ることが可能であるのかを見極める必要がある。さらに、歩み寄ることが必要であれば、どのように歩み寄ることができるのだろうか。

授業担当者は、「日本から来た訪問者」としての立場を利用して、さまざまな活動を通して授業担当者の「確信」を明示することにした。このことは、学生自身の「確信」に対する気づきを生み、必要に応じて歩み寄りを促すと考えたからである。では、学生に授業担当者の「確信」を明示するためにはどのようなクラス作りが必要なのだろうか。

佐伯（1995）は、ある「日本語読み書き学級」が、お互いが三人称的にかかわっている世界である「they世界」から相互に二人称的関係でかかわり、互いが相手を「理解（appreciation）」（賞味、感謝）しあうような世界である「you世界」へ変容する過程について述べている。

そこでは、日本語読み書き学級が、モテバリ君という学生の「サブレ分配事件」をきっかけに、学級が情報源を常に教師が持つ「教師から学ぶ」場から、「相互理解と協力」の場に変容している。それは、これまで教師側にあった情報源が、学級生側に移り、教師は学級生が「語る」自己表現を支援するために日本語を教えることを中心とした授業を行うようになったからである。

このことは、日常生活に役立つコミュニケーションを学ぶ機会となり、それが学級に受け入れられたための変容だと考えられる。

今回の集中講義は、学習者同士がすでに顔見知りまたは友人であり、初対面なのは授業担当者のみであるという状況で行われる。その第1時限目の授業は、その後の2週間を大きく左右すると予測できる。授業担当者は、学習者にとって受動的な講義はじめのではなく、能動的な活動を取り入れ、教室に相互理解と協力の雰囲気を作り上げることが必要だと考えた。

しかし、教師から情報や知識を得ることを期待して、今回の集中講義に参加している学生もいるだろう。そのため、1. はじめに述べた2点に、学生が自己紹介をする場合に役立つ技術を学ぶことを加え、第1時限目の目的とした。

本稿では、日本語集中講義の第1時限目に行われた他者紹介を行う活動を振り返る。そして考察から得られた

知見を以下に提示し、他者紹介を行う活動が学習共同体へ導く基礎作りに有効であることを報告する。

4. 背景

この実践は、2006年12月に韓国の某大学で行われた。この大学は、まだ5年目の新しい大学で、第1期の卒業生を出したばかりである。学部は2学部であり、学生の大半が成績によって様々な奨学金を受けているという特徴を持っている。また、全寮制であり、ライバル心が強いため成績は学生の中で重要な位置を占めている。毎年12月に2週間の日本語集中講義が行われている。日本語集中講義への参加は必修ではなく、特別な授業料を払い、希望者が参加している。

この集中講義は、出席と成績により単位が与えられているもので、参加者は日本語を学習している大学1、2年生である。学生は、集中講義が始まる前にクラス分けテストで初中級と上級に分けられ、初中級クラスは15名、上級クラスは7名であった。日本語学習歴はさまざままで、高校から学習している者もいれば、大学に入学してからはじめた者もいる。

授業担当者とは全員初対面であり、授業担当者は日本語のみを使用して授業を行うように集中講義の責任者から依頼されていた。この日本語集中講義は3名の教員で行われたが、授業担当者以外の2名はこの大学の教員であった。2名の教員は、集中講義の責任者である韓国人男性教員と日本人女性教員である。彼らはこれまで日本語の授業を担当していた。

日本語集中講義は、1日3コマ(1コマ75分)であり、初中級は、会話、聴解、読解、文法、上級は聴解、読解、ディスカッション、敬語が組み合わされて行われた。各講義は1週間が終了した時点で小テストが行われ、最終日には総合テストが行われた。毎日講義の後には、アクティビティと日本人留学生による擬音語・擬態語の学習とクイズが行われた。アクティビティでは、日本語能力に関係なく、1グループ4~5名の韓国人学生に対して1名の日本人留学生が参加し、日本語クイズや日本の観光地紹介などが行われた。テストやアクティビティには、賞金・商品が設けられていた。

日本語集中講義の初日には、参加学生と授業者の顔合わせが行われた。教室に教員2名、授業担当者1名、参加者22名で行われた。教員から授業担当者の説明が韓国語で行われ、授業担当者は日本語で自己紹介を行った。その後、教員から促され学生が日本語で自己紹介を行ったが、すべて「名前」と「よろしくお願ひします」という形式的なものであった。

5. 第1时限目の計画

他者紹介を行う活動は、授業担当者が受け持つ上級クラスと中級クラス、それぞれの第1时限目に行われた。ここでは、上級クラスの第1时限目の授業計画についてまとめる。

授業は、(1) 授業担当者の自己紹介、(2) 本時の目標、(3) 他者紹介の活動、(4) まとめで構成されている。概要は以下の通りである。

概要：

日時：2006年12月18日(月)

10:30~11:45

場所：大学の教室

対象：大学1年生、2年生

教材：他者紹介

目標：情報収集・選択と発表の手順を理解する

表1：授業案

導入 (5分)	授業担当者の自己紹介
ねらい	クラスの雰囲気作り
活動	授業者の日本語を聞き取る
展開① (55分)	他者紹介を行うための情報収集と選択
ねらい	①インタビューによって情報を集め、発表の手順を身につけること ・情報を収集する ・素材を取り出す ・構成を考える
活動	①動機付け 日本人である授業担当者が、初対面である韓国人学生の名前を覚えることは難しい。そのため何か印象的な紹介をして欲しい ②ペア作り ③質問を考える (ワークシート①) ④インタビューをする ⑤原稿を作成する (ワークシート②) ⑥練習をする
展開② (15分)	発表と評価 (ワークシート③)
ねらい	①発表を経験する ②評価を行い、振り返りをする
活動	①ペア相手を紹介する ②友達の発表の評価をする
まとめ	ワークシートの回収
ねらい	
活動	①ワークシートの回収 ②確認

上記の案を実施するために、以下の具体的な計画を作成した。

5.1. 授業担当者の自己紹介

授業担当者は、日本語集中講義に参加する学生が、すでに教員や先輩から授業担当者のさまざまな情報を得ていると考えていた。²そのため、第1時限目の際の授業者の自己紹介は、あまり時間をかけず、短く、印象的なものにしようと考えた。最も短い自己紹介のひとつは、名前の後に「よろしくお願いします」というものである。また、黒板に名前を漢字で書いて意味を説明するという方法もある。しかし、これらの自己紹介の方法では、ありきたりでそれほど印象的なものではない。では、韓国の大学で短く、印象的な自己紹介をするためにはどのような方法があるであろうか。

授業担当者は、自分の名前を頭文字とした短文を予め作成して、あいうえお作文の要領で自己紹介をする方法を採用することにした。その理由は、韓国語の名前には

「ン」の音が含まれることがあり、短文作成が難しい場合があることから、このような自己紹介の経験はないのではないかと考えたからである。

5.2. 本時の目標

授業担当者は、第1時限目の授業で、以下の3点を目標とした。

- ①学生同士が助け合うことができる教室の雰囲気を作る
- ②授業担当者が、学生の日本語能力と学習への参加態度を把握する
- ③学生が、情報収集・選択と発表の手順を理解する

全員の学生が日本語集中講義への参加がはじめてであり、さまざまな情報から不安を感じていると予測できた。2週間の日本語集中講義を円滑に進めるためには、クラスの雰囲気作りは重要である。そのために、学生には本時の目標をすべて説明するのではなく、「授業担当者が学生の名前を覚えることが苦手なため何か印象的な紹介をして欲しい」と説明し、動機付けをすることにした。

授業担当者は、学生に受動的な学びではなく、能動的な学びを経験させ、学生の持つ「確信」に刺激を与えたと考えていた。

5.3. 他者紹介の活動

(1) ペア作り

まず、学生同士をインタビューさせるためにペアを作る。必ずしもペアにする必要はないが、今回はインタビューすること自体が目的の活動ではないため、インタ

ビュー後の活動のことも考えペアとする。しかし、学生が奇数の場合は3人でグループとし、AさんがBさんに、BさんがCさんに、CさんがAさんにという順でインタビューすることとする。

第1時限目であることから、隣の席に座っている人は普段から仲のよい人だと考えられる。また、授業担当者は、学生それぞれの日本語能力の違いが分からぬことから、席の離れている人同士をペアにすることとする。席替えをして、2人が向かい合いの席となるように机を動かし、他のペアと離す。

(2) 質問を考える

ペアの相手にインタビューをするための質問を考える。考案した質問とそれに対する相手の応答を書き込むことができるワークシート①を使い、日本語で作成するように指示をする。この時間に学生の書いているワークシート①を見てまわり、日本語の間違いなどを指摘し、個別に話しをする。

(3) インタビューをする

インタビュー時間は、各4分として、4分経過したら交代することを学生に予め知らせておく。ワークシート①にメモを取りながらインタビューをするように指示する。また、用意した質問を全てする必要はなく、相手の応答の中に興味を持ったものがあった場合は、その話題についてさらに質問をするように指示する。

それぞれのインタビューが終了した後、インタビューをして得た情報から「印象的な紹介」をするために中心とする情報を決める。そして、追加のインタビューが必要な場合のための時間を与え、中心とする情報を決めることと追加のインタビューをすることで8分とする。

(4) 発表メモを作成する

インタビューをした相手の紹介をするためのメモを作成する(15分)。必ずしも文章化する必要はなく、中心にすると決めた情報を柱にどのような順序で紹介をするかを考えさせる。「私はこれから、

_____さんの紹介をします」と冒頭に、「これで_____さんの紹介を終わります」と最後に書かれているワークシート②に書き込む。その際、発表の時間が2分であることを知らせる。

(5) 発表の順番を決める

学生のメモ作りの進度を見ながら授業担当者が発表の順番を決める。

(6) 発表の練習をする

それぞれ声に出して練習をする。メモを見ないで発表できるように練習を繰り返すように指示する。

(7) 発表と評価

発表者の発表は、ワークシート③に評価を書き込みながら聞く。また、自己評価欄への書き込みをして提出する。

5.4.まとめ

ワークシート①②③を回収して、授業のまとめをする。自己紹介を行う場合にも中心的なテーマを一つ決めて話す方法があることを紹介する。また、たくさんある情報から中心とする情報を取り出し、それをまとめて発表するという手順を今後の日本語集中講義で活用できるので覚えておくように指示する。³

6. 他者紹介活動の実施概要

上記のように計画された授業は、実施の際に随時訂正、変更された。以下にどのような訂正、変更が行われたのかを提示する。今回取り上げるのは、4.3. 他者紹介の活動のみとする。

6.1. 修正・変更について

・ペア作り

学生は、男子3名、女子4名であったため、男女ペアを作り、一組は男子1名、女子2名とした。空いている席へペアで移動するよう指示をし、日本語のレベルに差がある学生がペアになった場合、(2) 質問を考える活動の際に助け合いが必要になる場合があると考えたため必ずしも向かい合う必要はないことを伝えた。ワークシートや辞書、筆記用具のみを持って移動し、発表時には元の席に戻ることも伝えた。

・インタビューをする

情報を全て使って発表するのではなく、「印象的な紹介」を行うための情報を選別し、ワークシートに印を付けるように指示をした。相手の紹介を念頭に置いて必要であれば追加のインタビューをするように指示をした。

・発表メモを作成する

学生によって、メモの作成にかかる時間に差が生じたため、(6) 発表の練習をする 活動と合わせて25分とすることに変更した。辞書を持っていない学生もいたため、韓国語で他の学生に尋ねる場面が見られたため、表現がわからない場合、質問がある場合などは個別に対応をした。しかし、授業担当者が韓国語を理解できないため解決できないものについては、他の学生に助けを求めた。

・発表と評価

発表者の発表は、黒板の前に出て行うこととし、各発

表が終わった時点で授業担当者が紹介された学生について質問をすることにした。また、他の学生からも質問を受け付けることとした。それは、発表のやり方を評価するだけでなく、紹介の内容で興味を持ったことや確認したいことをその場で発表しあったほうがよいと考えたからである。また、授業の感想についても記述するように指示した。

6.2. 授業の様子

以下、それぞれの活動について学生の取り組みをいくつか紹介する。まず、(2) 質問を考える場面である。

・名前の漢字表記について

全ての学生がインタビュー相手に名前と誕生日について質問していた。学生Aは、インタビュー相手Bに名前を漢字ではどのように書くのかを質問していた。その理由について、「日本へ行った時に、自分が聞かれた」と話している。学生Aは、授業担当者が「学生の名前を覚えることが苦手」と話していることと自分の経験を関連させ、聞き手である授業担当者に配慮したと考えられる。授業担当者は、このことからワークシートを回収する際に、学生に漢字またはカタカナによる名前の表記を指示した。

そのほかにもワークシートには、週末の過ごし方や得意なスポーツ、カラオケでよく歌う日本の歌などの質問がみられた。

次に、(3) インタビューをする場面である。

・家族について

きょうだいやペットについて、全てのペアが質問していた。以下は、学生Cがペア相手Dにきょうだいの有無について質問した場面である。

学生C: きょうだいはいますか?

学生D: 妹、ひとり

学生C: 何歳?

学生D: 同じ

学生C: 同じ?

学生D: うん

学生C: えー、＊＊＊?

学生D: そう

学生C: 日本語は何?

学生D: あー、分かりません

(*は、韓国語で「双子」という意味の語彙を発話している)

学生Dには、双子の妹がいるが、学生Cも学生Dも「双子」という日本語の語彙を使用できていない。2人は辞書で調べてワークシートに書き込んだ。学生Dは、

この後で「知ってる」と話していることから思い出すことができなかつたと考えられる。未習語や忘れてしまつた語について学生同士の助け合いがみられた。

・日本語の学習動機について

日本語の学習を始めた時期は、学生によってさまざまである。また、学習の動機も様々で、文通相手が日本人だった、好きなアイドルグループがいたなどがある。学生Eは、ペア相手である学生Fの質問に、日本のアニメが好きだったことがきっかけとなり日本語の学習を始めたと答えた。また、今はドラマもよく見ていると話したことから学生Fは、「何のドラマが好きですか?」など関連した質問を続けていた。

最後は、(7) 発表と評価をする場面である。発表が終わると発表者に向かって質問がされた。しかし、必ずしも発表者が情報を得ているとは限らないため、紹介された学生が答える場面もあった。また、質問によっては学生ではなく、授業担当者に対して質問が投げかけられる場合もあった。上記の学生Fが学生Eを紹介した場面で、日本のドラマの名前を出した時の例をあげる。学生Cが「先生は何を見ますか?」と質問をしたのである。授業担当者が「〇〇〇〇の最終回が見られなくて残念です」と答えると、ある学生は「〇〇〇〇〇」と反復し、ある学生は「最終回?」と隣の学生に尋ねた。その後、以下の会話を続いた。

学生G：先生、一緒に見ましょう

授業担当者：えっ、見られるの?

学生B：はい、パソコンで

授業担当者：あー、なるほどねー

学生G：二日、遅いです

授業担当者：えっ、それは字幕?吹き替え?

学生G：えっ?

授業担当者：えーっと、それは、韓国語ですか?

学生G：あー、えーっと、違います

授業担当者：画面の下に韓国語が出るの?

学生G：はい

授業担当者：韓国語の字幕が出るんですね

学生G：はい、字幕です

授業担当者：みんな、見てるんですか?

学生：はい

この会話はその後も続き、授業担当者がほかにどのようなドラマを見ているのかを学生達に質問したところ、ドラマのタイトルや昔のドラマも見ることができることなどの発話が続いた。これらの発話は、決められた会話文を練習しているのとは異なり、それぞれが自分の伝

えたいことを表現しようと努力した現れである。学生の中には自分の言いたいことが上手くいえない学生もある。しかし、授業担当者だけではなく、他の学生も彼の発話を助けながらお互いが理解しようと協力していた。このような「伝えたい」「分かりたい」という動機から生まれた活動の積み重ねがあったからこそ、教室は共同体へと動き始めたと考えられる。

ほかにも食べ物やペットについてクラス全体で話すことができた。

今回の日本語集中講義に参加した学生の中に、これまでに他者紹介の活動に参加したことのある学生は一人もおらず、全員がはじめてであった。学生のワークシートには以下の感想が書かれていた。

- ・難しかった
- ・先輩から厳しい先生だと聞いていたので緊張したが、すぐに時間が過ぎた
- ・インタビューをして友達の知らないところが分かった
- ・テーマを選ぶことが難しかった
- ・発表がおもしろかった
- ・緊張した
- ・評価は難しい

(注：筆者が加筆・修正している)

クラスメイトの発表に対する評価については、メモを棒読みする学生がいなかったことから概ね肯定的であった。それは、日本語の能力について、クラス内に差があることを学生同士が了承していることから、発音やスマーズさについては、努力を好意的に評価したと考えられる。しかし、発表態度に対しては、体が揺れることや視線の偏りなどが指摘された。

自分の発表に対する評価は、日本語の間違いや言い淀みに対する否定的な評価がみられた。

授業担当者は、学生が、質問を考える場面やメモを作成する場面で「書くこと」、発表と評価の場面で「聞くこと」、「話すこと」の能力を推測することが可能であった。また、学習への参加態度もインタビューをする場面や発表に対する質問をする場面から把握することができた。発表の手順についても、実際の発表や回収したワークシートから確認することができた。

7.まとめと今後の課題

他者紹介の活動を計画した経緯や授業実践を振り返ることで以下の点が明らかになった。他者紹介の活動は、①学生同士の助け合いが行われる、②授業担当者が学生の日本語の能力や学習への参加態度を把握することができる、③学生が、情報収集・選択と発表の手順を理解することができる活動として、初対面の学生に対して行

う第1時限目の活動として有効だと考えられる。

今回の日本語集中講義では、2週間の中に、ペア活動、グループ活動を行う予定があった。第1時限目で、学生が「伝えられる」「分かりあえる」という経験を共有することができたことで、学生同士がライバル、または先輩、後輩としてではなく、クラスメイトとして対等に接することができるようになった。

今回の他者紹介の活動では、特に、質問作りにおける助け合いや発表における相互理解と協力などが生まれたことから、学びの共同体へ導く基礎ができたと考えられる。また、このような短期集中のプログラムだけではなく、様々な国から学生が集まる語学教室などでも第1時限目の授業として有効な活動だと考えられる。今回は、上級クラスでの実践を報告したが、初中級クラスにおいても、「伝えたい」「分かりたい」という雰囲気が作られ、助け合いや協力がみられた。

教師も学生同士も初対面である場合には、語学学習のクラスだけでなく、発表の手順を学びながら相互理解や協力が生まれる活動であるため、さまざまな教室で、第1時限目の活動の一つとして活用が可能だと考えられる。

¹ 能力試験とは、ここでは日本語を母語（子供の頃から使っている言葉）としない人を対象として、日本語能力を測定し、認定することを目的として行われているものを指す。正式名称は、日本語能力試験であり、財団法人日本国際教育支援協会によって、年に1回、日本国内20都道府県・海外46の国・地域、127都市で行われている。受験者は全世界で約43万人である。ホームページは以下。

<http://www.jees.or.jp/jlpt/index.htm>

そのほかには、日本留学試験がある。この試験は日本語能力試験と私費外国人留学生統一試験（2001年12月の実施をもって廃止）に代わる試験として、独立行政法人日本学生支援機構により2002年より年に2回実施されている。日本留学試験は、日本語以外に理科（物理・化学・生物）、総合科目及び数学があり、日本の各大学が指定する受験科目を選択して受験する方式となっている。日本語の試験以外は、出題言語を日本語と英語から出願時に選択することができる。ホームページは以下。

<http://www.jasso.go.jp/eju/index.html>

² 授業担当者がこの大学を訪れるのは、前年度に続き2回目であった。集中講義の責任者である韓国人男性教員は、前年度も責任者であった。日本人女性教員と授業担当者は、面識があり、訪韓する前に予定や使用予定の教科書等の連絡をメールで取っていた。また、今回集中講義に参加した学生は、4. 背景で述べた通り、全寮制であることから、前年度集中講義を受けた学生から話を聞いていたと考えられた。

³ 2週間の授業の中で、テーマについて自分の意見を發

表する活動が計画されていた。また、「思考マップ」を使って自分の話したい情報を絞り込む活動も計画されていた。

「思考マップ」については以下を参照。

入部明子『アメリカの表現教育とコンピューター小・中・高・大学の教育事情ー』冬至書房、1996

入部明子『論理的文章学習帳』牧野出版、2002

荒木晶子・向後千春・筒井洋一『自己表現力の教室』情報センター出版局、2000

参考文献：

岡崎眞「學習者と教師の持つ言語學習についての確信」

宮崎里司・J.V.ネウストブニ共編『日本語教育と日本語學習—學習ストラテジー論にむけて』くろしお出版、1999

佐伯脣・藤田英典・佐藤学編『シリーズ学びと文化① 学びへの誘い』東京大学出版、1995

藤長かおる・中村雅子・長坂水晶・王崇梁「韓国の高校日本語教師も授業スタイル調査」『日本語国際センター紀要』9号、国際交流基金日本語国際センター、1999、P103~122